

## ひげのヒーロー

「今日こそ電気ついたか。」

毎日、おじいちゃんとお父さんが電話をよこす。

3月11日、巨大地しん発生。

その時から、当たり前だと思っていた生活が消えた。電気も水も生活するすべてのものがなくなった。

ぼくのおじいちゃんとお父さんは、電気工事士。毎日、ぼくがねた夜中に帰ってきて、朝4時には家を出る。

「なんとか電気だけでも。」

さむい中、復旧作業におわれていた。しかし、何日待っていても電気はつかなかった。

「なんて、おじいちゃんもお父さんもがんばっているのに電気につかないの。」

と思ったりした。

電気がない生活が、こんなにもひどいものだとは思わなかった。毎日、テレビを見て、夜は電気をつけると明るくなる。お風呂に入るのも、すべて電気が必要なのだ。その電気がない今、何もできない。

(こんな日がいつまでつづくの。)

と、かなしくて不安で泣いた。

ひさしぶりに会ったお父さんの顔は、ひげだらけて、とてもつかれた顔をしていた。ぼくは、クマみたいだとわらってしまったけれど、カッコいいと思った。いつになったら電気がつくのと、おこったり、ないたりした自分がはずかしくなった。

次の日、お父さんは、

「お母さんの言うことをきちんと聞いて、たすけてあげてな。」

と、ぼくをだきしめて、しおがまに復旧作業に出かけて行った。

今年のお正月もお父さんは、大雪で停電になっていた岩手県に行った。

今も、ひ災地の復旧作業はつづいているが、電気の明かりは、きっと人々の心を明るくしてくれるだろう。

ぼくにとって、お父さんはヒーローだ。

電気の大切さを知ったぼくは、大人になったら、お父さんのような電気工事士になろうと思う。

(作文宮城60号 特別編「あの子どもたち」より)

